史学科創設三十年の歩み

私は昭和二十六年、別府大学の前身別府女子大学に赴任した。未だ戦後と言う時代で、舗装していない大学通りは風が吹くと「黄塵万丈」という形容がぴったり、砂塵が舞い上がり、坂道を登るのは大変な苦労であった。梅雨の時期の泥濘は、転ぶと全身が泥の固まりとなった。泥は何故か黒く、顔に付いた泥をふきとると墨を塗ったように見えておかしかった。それでも早春になると田圃の畦道いっぱいに菜の花が咲き乱れ、まもなくレンゲの花が絨毯を敷いたように咲き誇った。

六勝園から大学通りを歩いて登ると、やがて深い森があった。みるとアラカシが主で五月になると淡く白い花房をつけて森は輝いて見えた。校門は粘土を芯として川石を張り付けただけの粗末なものであった。そこに「別府女子大学」という真新しい木の表札があった。それを嗅いでみると未だ木の匂いが残っていた。この粗末な校門と真新しい表札が辺りの森と調和して雰囲気を出していた。少し後になって知ったことであるがこの森について、イギリスの高名な詩人ブランデンは女子学生に「森は人生の泉」という講義をされたことを知った。私にとってもこの森は感動的であった。

大学の校門を入ると、木造二階建の本館まで短い距離であったが深い森の中を歩いた。この森の奥に私が追い求めている何かがある。そんな思いを掻き立てるような森であった。本館に入ると廊下でハイヒールをはいた女子学生とすれ違った。迎えてくれたフランス文学専攻の吉村啓喜講師（バレリィの詩を得意としていた）が「板張の廊下は所々いたんでいて、ハイヒールの踵が嵌まり込み折れてしまうことがある」と説明してくれた。そして今日は午前中に高田眞二先生の哲学の講義があり、午後には川島つゆ先生の日本文学論があると教えてくれた。この高名な先生は、いずれも戦禍を逃れて、別府に住み着いたとのことであったが子細は知らない。だが田舎のしかも森の中の一軒家のような小さな大学にこんな高名な先生が講義しているということは不思議であった。

約束の時間を大幅に遅れて佐藤義詮先生（学長）が姿を現した。先生は西洋古典文学を専攻されていると聞いていたが、三浦梅園、帆足万里、広瀬淡窓などの儒学者、田能村竹田などの豊後文人を含めてこれらを「豊後学」と称し、その研究に人並はずれた知識をもっていることを知ったのはこのときであった。

佐藤先生は西洋の哲学と、東洋思想をもって学を高め、このことのみが人を自由にする道だと考えていた。先生が本学の理想を「真理は我等を自由にする」ということ

としたが、それは、西洋の哲学、東洋の思想への憬れであり、これを先生は単に「学」と言った。

先生は「大学が政治に屈伏するとき、再び自由は無くなる」といわれ大学紛争を通して政治と対決しなければならないとも言われた。そして最後に残されたことは「貴方は一人になっても学を高める努力をしてほしい」であった。

史学科の創設は昭和三十八年四月であり、佐藤義詮先生の「学」をもって「自由」とするという精神を高揚して三十年の歩みを続けてきた。そして、このたび三十年の記念事業として歴史フォーラム「磨崖仏の世界」が行われた。私は戦後の荒廃した臼杵石仏の研究と修復の仕事に過去四十年の歳月を費やしてきた。そしてどうにかわかったことは文化遺産の修復は復元して誇示したい誘惑を捨て去ることだということであった。それは佐藤先生の「学」とは全てのものに対して誇示することを止めよという教えがあったためである。何故なら人類共通の遺産に手を加えれば長く偽りの遺産を作りだす罪を犯しかねないからである。

臼杵石仏のような文化遺産の修復は誇示することのない真理の伝達者のみが可能である。それゆえに「磨崖仏の世界」の討論は、過去の文化のメッセージを間違いなく未来につなぐ「学」の討論会として厳しく行われた。まさしく「学」をもって「自由」

とする佐藤義詮先生の理想像のもとに行動した成果といってよい。

「史学論叢」は史学科創設の昭和三十八年、今永清二先生と計り、「別府史学」というものをつくり、佐藤義詮先生の「豊後学」を継承することを暗黙に合意して準備をすすめ、昭和四十年に第一巻が刊行された。その後回を重ね、二十五号を発刊し、このたび臼杵市との合同の歴史フォーラムを掲載することができた。この論集の評価によって、今日の史学科、「別府史学」を厳しく受け止め、更に研究を深めていきたいと考えている。

平成七年二月

史学研究会会長　賀　川　光　夫